



# おい！おい

山口 琢也



七月某日、夕食中左上の奥歯がボロリと抜け落ちた。これで上の奥歯は左右すべて無くなり、老いがまた一歩しのび寄ってきた。

自分の老化にともないここ数年老人を見るときついウオツチしてしまうようになった。私は月に一度糖尿病とその合併症で診療を受けに東京の大病院に通っているがその外来の待合室は患者の三分の二は老人という老人の園、実に様々な老人をウオツチできるのである。

抱いたお孫さんに、それはまだ生後何ヶ月かという乳児だが、子守唄を聴かせているお婆ちゃんや、椅子に座らず立って抱いた子をゆすりながら歌っておられるのだが、その子守唄が全部外来の唄。『眠れ良い子よ』などとまあ次々にお歌いになる。そのうち、小声はだんだん大きくなり、ほとんどリサイタル状態と化した。あつてに取られて看護師も注意しない。あまりお上手とはいえないからまわりからの拍手もせいぜいまいサイタルはあつたのを白々させながらその後しばらく続くのであつたが、ふと見るとそばの椅子にすわって恥ずかしそうにうつむいてしまっている若い女性がいた。あれはお孫さんだあと誰かが納得できる光景であつた。

左右を若い女性の看護師に抱えられながら一人の爺さんがヨロヨロと歩いてきた。「いつともまないねえ。足もすっきり弱っちゃって。」「いいんですよ。」と二人の若い看護師はとて優しい。ふと見ると、あれ、爺さんの手の先は看護師の一人の豊かな胸のあたりに、頼いなかみかやりのおるわい！と思つて見ていたら、かみさんが首をかしげて言った。「あの爺さん、下の受付のところでは杖なんか要らないって感じでシヤキシヤ歩いていったのよ。」

「息子にはG大を首席で卒業しましてねえ、私には死んだ主人がマンションを3室残してくれましたねえ。」「わー、じゃ、悠々自適なお暮らししてわけですね。」「そのお婆さんの話相手になつてはいるのは中年の女性。」「まあ悠々自適とまではいいませんが、週に二回は銀座の銀座から特別に掘つてもらつたのを雇つてもらつてます。」「すこいじやないですか！」「と大げさに驚いて見せた女性はそこで呼ばれて中待合に消えた。しばらくして、空いたその席に別の女性が座つた。と、お婆さん、また話しかけたのである。勿論話は同じ首席と3室と銀座の銀座。この光景はこの後三回続いた。よく見ると、お婆さんの手には診察が済んで会計に持つてゆく伝票が握られていた。」「お婆ちゃん、あまりみんなに吹聴しているよ、泥棒に狙われるよ。」「と、シヤいな私はご本人に言つて差し上げる。」「お前、婆さんになつてもあんな風にいろいろ吹聴するなよ。」「とかみさん曰く、「しないわよーマンションもないし、第一あなただ大学は中退でしょうが。」



「この若え医者、に新薬で殺されそうになつてよー」薬局の待合室であつた。とどろきわたるような大声でまくしたてている爺さんがいる。またか、である。この爺さん、ここでも聞いているのだ。この爺さん、それを聞いたと通つてきてるのだからうか。でも殺されそうになつてよかつたね。しやべるネタをもらつたんだもんね。そのネタひとつでこれからさき一年は持つもんね。と思ひながら、ふと見ると、話し相手がいなくなつた爺さんの目が私を狙つてゐる。私はあわてて逃げ出した。実際に人はいる、人生もいろいろ、そして老人も様々。

それにしても人はみな老いる、などとのんきに言つていられないほど、我が老いは急速に進行中である。そしてその老いさら

ばえてゆく親父を従えて、息子こうやばかりやたらと元氣である。日々何の迷いもなく我が道を歩み、ことごとくに親父の残り少なくなつた精氣を惜み容赦なく吸い取つていく。親父は干からびるばかり。人生の日は西に傾いてまだ沈まない老人という「時」。さてこの干からび親父もせめてものひとあがきをしてみるか。してどうあがくか？例えば心ならずして退去を余儀なくされた世間の恨みを、まわりに当り散らしてはらしてみるか？心ならずも善人としての仮面をかぶつてすごした日々を少しでも取り返すべく紅灯の巻でもさまよつてみるか？はたまた頭の石化した老人を演じて、介護の人に嫌がられても思ひを押し通せる至福の時を味わつてみようか。しかし結局そんな元氣もなくやつとやつとこの体面を取り繕ひ力なくもニツと人に笑つて見れば、人は「ああ、こやの父ちゃんはどうこや（好々爺）や」と、誤解してくるやもしれぬ。などというところがオチか？げにかなしきは我が末路、世の心やさしき皆々様だ、どうか同情を！

(荒野・父)

## 親と子

遠藤 俊恵

「えんどーさん、おせんたくー」甲高い声で呼ぶ声がする。いつものように夢中で洗濯する彼を見つめながら、何を書こうかと悩んでいた私はふと考へてみた。なぜ福祉の世界に飛び込んだのか。振り返れば約九年前、保母さんになることを夢見て短大の幼児教育科に進学を決めた。その中で様々な人と出会い、刺激を受けた。方々で人生観が変わり、保母になった私は児童養護施設で働くことを決めた。この児童養護施設とは、家庭の事情で養育が困難であつたり、虐待を受けている子どもを保護するための施設である。施設にいる子ども達にとっては一時的な「自分の家」となる。そして私達は、子ども達の母親や父親・兄弟という存在となつて生活を共にするのである。施設にいる子どもは二歳から十八歳まで幅広く、自分のおかれてい

立場など解らずに、毎日はいやいやでいる元氣な子どももいれば、思春期を迎えて自分の生い立ちを知ろうとする子ども。反発を繰り返す子ども。自分の生き方を必死に考へていく子ども。様々な子ども達と共同生活をしている。その中で、子ども達は自分との葛藤を繰り返して成長していく。ある時私は子ども一人一人と向き合い、自分の力の無さを痛感させられた。どうせ先生には私の気持ちなんかわからない。そんな言葉に何も言えなかつた。まだまだ親に甘えたい時期に、親と離れて暮らすことの辛さ、会いたいのにとこにいるのか分からなくなつた。そんな経験を経た子ども達も多かつた。どんなに辛いことがあつても、前向きに生きること。四年の歳月の中で、自分にとって一番大切なことを見つけた気がする。私は、自分の選んだ道を歩み、やつて良かったと思つた。もつと他の世界も覗いてみたいと思つた。そして色々な思いを抱えて辿り着いたところ、それが現在である。



児童養護施設での経験を経て、この世界に飛び込んだ時に一番感じたことが親の温かさであつた。ごく当たり前のことなのかもしれないが、それが出来ずに苦しんでいる親は今の世の中にはたくさんいるのではないかとと思う。ここ数年の間メディアを賑がせているのは「児童虐待」「少年犯罪」。親が親になりきれずに苦しんだ末の結果が虐待という悲惨な行為。子どもと真剣に向き合えずにいることに気付かず、家庭円満を演じてしまった末の少年犯罪。どれをとっても我が子を愛する気持ちでどこか別の方へ流れてしまつていのではないかと感じる。そんな単純な構造のものでもないのだから、想像もつかない事態が起きていることを心に留めなければいけない。子どもにとって「親」とは何か。親にと

つて「子ども」とは何だろうか。私と生活を共にした子ども達、世間一般の子ども達。そして親達は、それぞれの関いかけに何と答えるだろうか。そんなことを考へながら自分自身を振り返る。私は親不孝者だと感じながら目をつぶら、幼い頃から今まで自分を思ひ出す。辛いことがあつた時、心配はかけたくないと察しに弱い自分を隠せられずにいた私。話さなければ分らないと思つたのは自分だけで、必ずそんな時は電話が鳴つていた。そして、声を聞いただけで胸が熱くなり、返事をすることが精一杯だつた。どんなに遠く離れていても見守つてくれている親がいる。離れたからこそわかる親のありがたさであつた。このふる里で働き始めて二年と数ヶ月。身勝手に親元を離れて自分の決めた道を突き進んできた。私は子ども達の親に対する気持ちと親が子どもを思う気持ち。二つの思いを目の当りにしてきた。そして、今こうして障害のある方達と触れ合う中で、温かな親の存在を目にする。今までの苦労や計り知れない思いを伏せた自然のやりとり。そうしたシーンをみる度にあの子ども達の顔を思い出す。(支援員)

毎日暑いですがねーすいかやビールの美味しい季節となりました。ここ和田浦は太陽が近くて、真つ青な空に爽々青な海。ひまわりやアサガオに囲まれて、自然の中で皆い汗流しています。夏休み、海・山のレジャーで房州へ向かう車の流れにのつて、君津からの運動。旅行気分を負けない意気込みで、到着すると元氣に「オハヨー」「さあ今日もいい汗流すぞー」佑啓五十二号をお届けします。霜崎 深雪

